

## 第34回国際養蜂会議

—ローザンヌで開催—

渡辺 英男  
酒井 哲夫  
大澤 華代

### 原点に帰った大会の企画

#### 1. 大会運営に新風を吹き込む

アピモンディア（国際養蜂協会連合の呼称）は、ここ10年マンネリ化しているというのが大方の風評で、なんとか脱却したいと会員達の多くが考えていた。

特に、国際会議は、名古屋・ワルシャワ以後、リオデジャネイロは大インフレに見舞われ、スピリッツは戦争で中止、北京は、中国の内部問題で、プロシーディングはおろか、負担金も支払っていない始末である。

一方、地球規模で、蜜源減少・環境汚染・異常気象が起こり、貿易問題も加わって、養蜂業の存続が難しくなり、一刻も早く手を打たなければならないという焦燥があった。

そこで、北京大会以後、100年前の結成当時の歴史を紐解き、原点に立ち返って、アピモンディアの在り方が討議され、この中で、ローザンヌ大会が企画されたのである。

ご承知の通り、2年に1度開催される国際養蜂会議は、総会・理事会・発表・展示会等が同

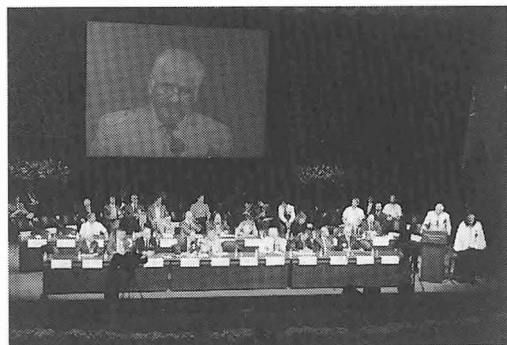


図2 開会式

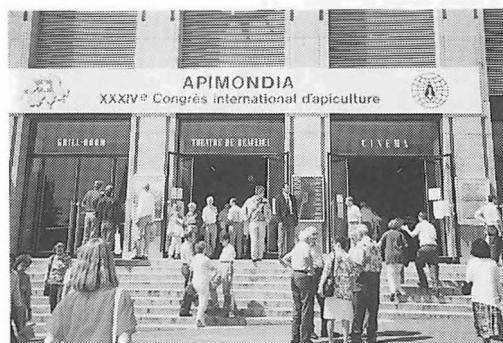


図1 会場となったボリュエ宮殿

時に行われるが、これに一本筋を通し、連動させ、具現することを根底に置いた。また、参加しやすく、わかりやすいようにした。

例えば、3種類（全日・3日・1日）のコースを用意して、多くの蜂友が参加できるようにし、言語の壁を配慮して、フィルムやビデオを増やした。また、時事問題に取り組むため、専門部会を設ける一方、アピエキスポは、できるだけ多くの国と分野から出展して頂くようにした。

更に、常任委員会の会長に、各自のセッションの案内（開会日）・導入と総括（当日）・結果（閉会日）を発表させ、以後2年間の活動の主なテーマにすることにした。

言語・習慣・歴史・政治の壁を越えながらの作業は大変であったが、4つの言語を持つ連邦共和制のお国柄と優秀な人達に支えられて、どうやら、所期の目的を達することができた。

#### 2. 先進諸国に示したホビー養蜂の意義

養蜂の社会的貢献を知れば、誰しも、地球上のすべての地域でミツバチを飼育することが望ましいと思う筈である。環境並びに食糧問題が深刻さを増す時、なおさらであろう。

ところが、現実には、経済や環境上の理由で、世界各地でミツバチの空洞化が進んでいる。

スイスは、九州程の山の多い小さな国であるが、各地に、隈無く、約30万群、飼育している。しかも、すべてホビーであるから、外国の安い生産物で、打撃を被ることもない。

彼等はミツバチの貢献を広くPRして、政府に協力させ、マーケットを拡大して、相応の利益を得ている。

会議を終えて、外国の蜂友達と5日程スイス国内を回ったが、自然環境の改善や食糧増産に対するミツバチの貢献を認識して、公費を投入している様子が伺えた。

先進国のミツバチの空洞化を埋める一つの答えをスイスの人達は示してくれたと思う。

### 3. 日本人達の貢献

今大会に参加した日本人は、約100名で、内半数は、会期中、開催地に滞在した。現地の養蜂を視察するエクスカージョンにも大勢参加し、スイスの人達を大いに喜ばせた。開会式だけの日本人、の印象を払拭したようだ。

また、名古屋市の井上氏、富田市の東氏が、それぞれ、利益を度外視してブースを構え、国際親善に努めていたのも、好感が持たれた。

今大会のレポートは、60か国から474題提出されたが、日本からは3題で、出席者の割には少なかった。しかし、玉川大学の酒井・松香・吉田先生達のお陰で、面目を保つことができた。役目柄、多数のレポートに目を通したが、日本のレベルは高い方である。世界の養蜂の発展の為に、日頃の成果を発表して欲しい。

(〒158 世田谷区等々力7-23-11

アピモンデア理事(養蜂経済常任委員長) 渡辺 英男)

### チンメルマン博士と *nigra-nigra* のふる里で

APIMONDIA ローザンヌ大会でスイス行きを決めたとき、まず第一に頭に浮かび、是非たずねてみたいと思ったのが、その名の示す通りに真っ黒のミツバチ *nigra-nigra* 品種のことであった。1952年、このミツバチの女王蜂をスイスから遙々送って下さったのは、玉川学園をこよなく愛し、戦前戦後を通して6度も玉川の丘に來られたチンメルマン博士であった。

チンメルマン博士は、文学、理学、経済学の3つの博士号を持ち、「地球はわれらの故郷である」をモットーに世界中を旅行し、国と国、人と人との協和敬愛運動をつづけておられた。1930年、初めて日本を訪れたときに玉川学園のことを知り、開校間もない学園で半年間滞在、生徒たちに語学を教え、ピアノを弾き共に

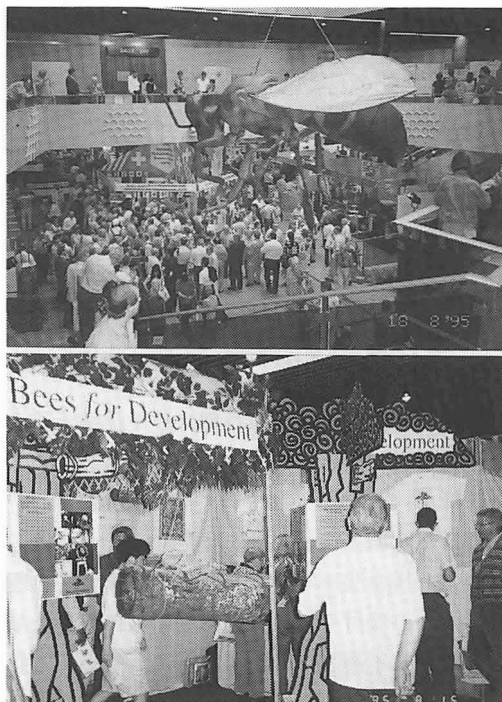


図3 アピエクスポの会場

歌い、牛舎で搾乳を一緒にやるなど、すっかり小原國芳先生の新教育の実践に感激し、とりこになられた方である。戦後1949年11月、世界旅行の途次再び玉川学園を訪れ、数カ月の滞在中で戦後の日本をつぶさに調査された。玉川の丘では、新制玉川大学が発足し、岡田一次博士が小原國芳先生のご賛同と激励を受けてミツバチ研究にとりかかれたときであった。チンメルマン博士に、ヨーロッパのミツバチ研究者たちとの連絡を依頼されたところ、さっそく帰国後スイスの有名なミツバチの月刊誌である「Schweizerische Bienen-Zeitung」をはじめ、ミツバチの遺伝や飼育法などの書籍を寄贈して下さり、さらにスイスで50年間にわたり育成淘汰され、スイスの自然と国民性に順応した品種であるとして、*nigra-nigra* を送ってこられたのだった。これは日本にはかつて輸入されたことのないミツバチ品種であった。

当時その飼育と形態学的比較研究に携わった1人として、形態学的に見て他のセイヨウミツバチ (*mellifera*) 品種よりもニホンミツバチに近く、生態学的にも、群はあまり大きくならず分蜂性がやや強いなどニホンミツバチと似てい



図4 アジア養蜂研究会 (AAA) の集会

る点があり、北方系（寒冷地）の1品種と言えるのではないかと考えた。

8月15日（火）4千人をこえる参加者に Palais de Beaulieu の登録受付はごった返していた。残念ながら、これだけの出席者を処理するための受付システムとしては誠に不十分な人員配備と不適当な方法であった。前もって登録費を支払っていた私たちですら、名簿の中の自分の名前を改めて自分で探して初めて会議関係の書類の入った鞆や名札を受け取れるのである。開会式壇上の APIMONDIA 役員の顔ぶれを見ると、10年前名古屋大会の頃のお顔は会長の Borneck 氏と見事な口髭の Tonsley 副会長の2人だけで、歳月の移り変わりを実感した。しかし一方渡辺英男氏が養蜂経済、また旧知の Nicola J. Bradbear 女史が途上国の養蜂分科会の委員長として壇上におられ、力強く感じた。広い会場なので、特に講演者や壇上の様子をテレビカメラでステージのスクリーンに大写しにする工夫がなされていた。日本からも日本養蜂はちみつ協会竹下富雄団長以下37名の皆さん、その他のグループも加えると100名くらいの出席者で大変頼もしく思った。

アピエクスポ exhibition（展示会）の開会式に引き続いて、11時30分からはそれぞれの分科会委員長から各分野の発表内容の説明がなされ、渡辺英男氏も15分位講演された。

昼食後、会場の裏山へ登り、色々なヨーロッパ式巣箱で十数群のミツバチが置いてある蜂場をたずねた。先述した *nigra-nigra* 品種もいるに違いないと思い、一群一群丹念に見て回ったところ、ハチはすべて黒色系の品種で白いバン

ドのはっきりしたものから、ほとんどバンドはなく真っ黒なものまで多様であった。これこそは *nigra-nigra* に違いないと胸をときめかせたが、よく聞いてみると違って、今では一部の地方で飼育されているにすぎず、スイスの現在の一般普及品種はコーカシアン、カーニオラン系とのことであった。

午後の分科会は病理学であった。

8月16日（水）2日目、午前中は養蜂経済と Varroa mites に関する分科会が2会場で平行して行われた。午後2時からミツバチ生物学とバロアの会議が続き、午後5時からポスターセッションが行われた。玉川大学から松香光夫教授がベトナムからの留学生 Hoan 氏の研究内容を、吉田忠晴助教授はミツバチ交尾飛行時刻の光周制御について発表し、1時間の持ち時間を十分に活用して質問に応じていた。

4千人余の出席者で各会場は熱気にあふれ、発表会場、ポスター会場では研究者による発表と質疑が熱心に行われた。96のスタンドからなる展示場は世界中から集められた養蜂具、ミツバチ生産物、それぞれのお国柄を表現するポスターなどで埋め尽くされ、浅草の仲見世を彷彿とさせる「門前市をなす」賑わいであった。日本からは井上敦夫氏の養蜂研究所と東政宏氏の東養蜂、(株)セラリカ NODA が出店され、好評であった。

午後8時から宮殿の大会場でスイス民族文化の夕べが催された。スイスのフォークソング、フォークダンスに参加者は我を忘れ、十分に堪能することができた。

8月17日（木）1日研修ツアーは12のグループに分かれ、朝7時半をめどに宮殿前広場から次々と大型観光バスで出発した。私は Simmental 地方の花粉採集を主とする養蜂場と医療用ミツバチ生産物工場を見学し、さらに Gstaad 方面を見学する No. 50 のバスに乗った。レマン湖沿いにアウトバーンを進むバスの車窓からは、ガイドブックそのままのスイスの景色が見られ、国を挙げて観光立国に力を注いでいる国民性が羨ましいとつくづく感じさせられた。

- 手入れが行き届き、整然としたブドウ畑
- 山頂まで森や林以外はすべて牧草畑（あの急な斜面の草刈りは大変に違いないと話したことだった。）
- 山の高いところにも立派な家々があり、その窓辺を飾る色とりどりの花々
- 道路の側壁もコンクリートの打ちっ放しでなく石が張ってあったり、石積みであったり、その細かい心配り
- ナナカマドが色づきはじめ、玉川の丘でもクリスマスツリーによく使ったドイツウヒの大木も沿道でよく見られた。

日本の〇〇峡等とはスケールが違う、雄大な渓谷美に圧倒されながら Simmental に着くと、そこは古い教会、製材所、養魚場、養鶏場などが点在する典型的なスイスのカントリーで、1766年建築の旧家が博物館として保存されていた。その博物館の庭に咲くマジョレーヌの花には真っ黒い働き蜂が群がって花蜜を吸っていた。

Simmental の養蜂場では、近辺の養蜂家十数名が大きなスイスの旗を振って出迎えてくれた。養蜂組合の研修所をかねたヨーロッパ特有の蜂舎で10群のミツバチが飼われていた。巣門は赤、白、青、黄の色分けをされているが、巣箱同士は隙間なくびっしりつまっている。蜂舎の中にはいると、手入れをするための巣箱の扉があり、巣箱の中には花粉団子採取するトラップがつけられており、引き出しでそれを取り出すことができるようになっていた。

スイスの民族衣装を着た上品な老夫人にもう一度 *nigra-nigra* はいないだろうかと尋ねたところ、「ここにはいない。所々まだ飼っているようだが、今ではカーニカ、コーカシカ、リグスティカの雑種が主流で、群は大きくなるがこの地方の蜜源植物は少ないので、ハチミツの採取量は少ない」と説明してくれた。

屋外でケーキやジュース類のもてなしを受け、記念写真を撮り蜂場を後にしたが、ケーキやジュースにさっそく盗蜂が集まってきたので、流蜜する花が少ないことがよくわかった。

断崖絶壁の山道を2階建て大型バスではらはらしながら通り、途中降りだした雨もレマン湖がみえ始める頃には晴れ上がり、思い出多い excursion は無事終わった。

8月18日（金）午前中の分科会は養蜂技術、花粉媒介と病理学。私は Pollination の分科会で勉強した。

午後からはミツバチ治療学分科会と、ミツバチの国際間移動の討論会が開かれた。

午後5時から6時までのポスターセッションでは玉川大学松香教授、大澤華代大学院生などのプロポリスに関する発表があり、質問者は次々現れ、テレビの撮影も行われるなど盛会であった。

午後6時から7時までの1時間アジア養蜂研究協会の集会を行った。Borneck 会長、Koeniger 教授夫妻、オーストラリアの Guilfoyle 氏も参加して下さり、約50名の出席であった。松香事務局長の司会で特に来年10月にベトナム、ハノイで開催する第3回大会についての準備状況の説明をベトナムのハン女史にしてもらった。質疑応答の後、Wongsiri 副会長の閉会の言葉で会を終えた。

8月19日（土）午前中の分科会は開発途上国養蜂とパロアの2つで、これですべての分科会が終了した。

午後2時から渡辺英男氏などによる分科会の総括講演があり、午後3時から APIMONDIA 総会とメダル授与式。玉川大学が出品していた「アジアのミツバチ」の絵はがきセットが銀メダルに輝き、壇上の吉田忠晴先



図5 絵はがき「アジアのミツバチ」に授与された銀メダル

生に大きな拍手が送られた。

午後4時半からいよいよ閉会式、続いてお別れレセプションで第34回国際養蜂会議ローザンヌ大会は盛会裡に幕を閉じた。今回の会議ですでに決まっている1997年のアントワープ大会に続く36回大会がカナダのバンクーバーで、37回は南アフリカで開催と決定した。

松香光夫教授夫妻、野口耕司氏と私たち夫婦は大会の後、列車とレンタカーで南フランスから北イタリアをまわり、養蜂や農業事情の視察とともにヨーロッパの古い文化に触れる機会を得た。特に8月21日、南仏アビニョンから車で約1時間のApt市にあるJourdan氏の養蜂場を訪れたのでそれを付記したい。

同氏は3年前から自力で石造りの採蜜工場の建築をはじめ、ほぼ完成したところだった。200~250群を飼育しているとのことで、主要蜜源の一つのヒマワリはフランス人の嗜好に合わず、ほとんど餌蜜としているとのことである。人気があるのは南仏特産ラベンダーの蜜や甘露蜜で、日本のレンゲ蜜より数段高値で売買されていることがわかった。蜂は従来の黒色系のものもあるが、黄色系のリグスティカを最近導入し、良い成績を上げているとのことであった。

また最後にローマでは、名古屋大会の打ち合わせに訪問して以来の懐かしいアピモンディア本部にRiccardo Jannoni-Sebastianini事務総長を訪ね、懇談をすることができた。

(〒194 町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学ミツバチ科学研究施設内

アジア養蜂研究協会事務局 酒井 哲夫)

### スイスとプロポリスと私

今回のスイスでの第一印象は、青い澄んだ空に向かって荘厳にそびえ立つ「ポプラ」があちらこちらに植栽されていることであった。これまでに3回訪れたことのあるスイスだが、今までは何気なく見過ごしていた。しかし今回の訪問では自分に関係ある実験材料として自然にポプラに目が向いていくようになり、物事に対しての感じ方が少し成長したかなと思われた。

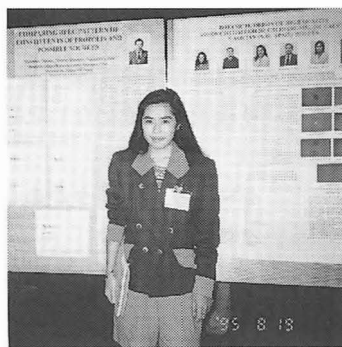


図6 ポスター発表を行う大澤華代さん

ポプラの木はヨーロッパにおけるプロポリスの主な起源植物のひとつに挙げられているが、日本ではヨーロッパほど多く植栽されていないので、日頃私は常にポプラを探している。そのため今回スイスに来て、特にポプラが印象に残ったというわけである。スイス産プロポリスの起源植物にはポプラからの渗出液が含まれているにちがいないと確信した。

私は、玉川大学において採集できるプロポリスの起源植物の探索を中心にHPLCで分析した結果をポスターで報告した。幸いにも大学の蜂場から50m以内にポプラの木が植栽されているので、ポプラは玉川産プロポリスの主な起源植物の一つであるとの結果を得ている。

会議に参加していたプロポリス研究グループの方々やアピエクスポ会場でプロポリスを販売している人々と交流をもち、数ヶ国のプロポリスのサンプルを入手できたことは、これからの研究に役に立つ、大きな収穫であった。特にイギリスのオックスフォード大学と共同研究をしているプロポリスの健康食品会社の研究者達との情報交換はよい刺激となった。また、プロポリスを集めているミツバチの写真やポスターなども見ることができ、さらに追求するものが増えた。今回のポスター発表は開催四日目に行われたが、関心が高く人々が絶えることなく見に来てくれたことはうれしかった。

今回このような国際会議参加の機会を与えて下さった先生方に感謝するとともに、さらに課題が増した今後の研究に励みたいと思う。

(〒194 町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学 大澤 華代)